

|  |  |
| --- | --- |
| 障害者施策 | サイトマップ |



[障害者施策トップ](http://www8.cao.go.jp/shougai/index.html) ＞ [意識啓発](http://www8.cao.go.jp/shougai/kou-kei/index-kk.html) ＞ [22年度心の輪を広げる体験作文・障害者週間のポスター作品](http://www8.cao.go.jp/shougai/kou-kei/22sakuhinshu/index.html) ＞ 平成22年度入賞作品　高校生・一般部門　佳作



|  |  |
| --- | --- |
| **出会い、ふれあい、心の輪～平成22年度入賞作品～****【高校生・一般部門】　◆佳作****Free Way<自由な移動>**

|  |
| --- |
| 櫛田美知子（東京都） |

電話が鳴った。障害を持つ仲間とワイナリーの収穫祭へ行く車中だった。「お父さん、今朝亡くなったよ。ほっぺくっつけ話しながら亡くなったよ。こんな幸せな死に方ないよ。ほんと幸せだよ。」母の声だった。悲しみより安堵感と安らぎが母の様子から伝わってきた。田舎の一般病院であったが、最期病室は父母二人にしてくれ、心電図モニターの音も消してくれていたようで、静かな最期と医療スタッフの配慮に感謝の気持ちでいっぱいになった。２年間癌の告知をしてからのいろいろなことが走馬灯のように浮かんだ。心からワインで乾杯であった。思い起こすと、16年前になる。突然の事故で私は下半身が麻痺して重度障害者になった。一瞬にして一生歩けなくなった。ショックで死にたくて仕方がなかった。苦しいリハビリに負けそうになったり、病室の白い天井をみていると、三女はまだ授乳中であったが、子供に会いたいと思っても会えないつらさと、そして会っても寝たままで動けない自分の現実が受け入れられずに、３人の母親であるということも忘れ、絶望感が何度と押し寄せてきた。その時、父は動けない私を自分の車に抱え込んで乗せ、子供に会わせたり、実家に連れ出してくれたりした。外の空気を吸わせてくれた。子供の笑顔を見ると、この子達のために頑張らねばと絶望から救われた。そして必死でリハビリをこなした。子供会いたさに手だけで運転する手動装置付きの車で運転も覚えた。痛み止めの注射を打ちながら、車椅子から車への移動も何回も落ちながらできるようになり、車椅子も１人で車に積み込むこともできるようになった。最初は至難の業に思えた。今では車が私の足である。３人の娘との生活には欠かせないし、車でいつでもどこでも「自由に移動」できたから、これまでひとり親家庭でも、仕事をしたり、学校など地域に参加できてきたと思う。２年前、父が癌であるとわかった。すでに転移をしていた。実家で母が介護をしていたが、ある日母が転んで骨折。父は急遽施設に預けられた。20日たった時である。遠く東京にいる私に「助けてくれ。」と泣いて父が電話をしてきた。プライドの高い父が！我慢の限界だったのだろう。私は「わかった。明日行くよ」と言って、翌日滋賀県まで、作ったばかりの簡易型電動車いすを車に積み込み車を走らせた。本当は自分のために丁度作ったものだった。施設に着くと父はベッドに寝た状態で、くしゃくしゃの顔をして泣いて喜んだ。そして昔エンジニアだったのか車椅子を上手に操作して施設内を動いた。外の空気も吸った。医師が「こんな笑顔はじめてみた。この車椅子はどこの？」など尋ねてきた。翌日、実家に父を連れ帰ってきた。16年前私が逆に連れて帰ってもらったのと反対である。父はかつて私が車椅子生活になり退院する時、実家を改造してくれた。その設備が父のために活きた。歩けなくなった父は電動車いすで庭の見える部屋や仏間や食堂など移動した。うれしそうであった。在宅サービスを受け軌道にのるのを見届け私は東京に戻った。父はしばらく実家で生活でき、その後容体が悪くなり病院に移った。後に知ったのだが、実家にいるうちに父は「悔しいが、自分はもう長くないので、あとのことはよろしく頼む」とお寺の住職にお願いしていたのだった。父が亡くなった知らせをきき、翌朝早く私は娘３人を車に乗せ、滋賀の実家に向かった。もちろん手動装置の車である。６時間走り続け、実家近くの関ヶ原インターに付くと黒い雨雲が急にやってきて大雨になった。そして買い物に店に立ち寄る。用を済ませ店をでると、何と先ほどの大雨は嘘のように去り、大きな見たこともないような虹がでている。虹を見ながら10分も走ると実家に着いた。親戚が私たちの到着を待っていた。着くやいなや、父は実家に別れを告げ、セレモニーホールへと。翌日葬儀後火葬場まで私は再び娘たちを車に乗せ移動した。何と例年より早く、伊吹山の初冠雪が真っ青な空に美しく映えた。運転しながら娘たちに話した。この間に、歩けなくなった父を私の車に乗せ、かつて長年勤めた会社や親戚や、父が育ったところなどドライブした時、すごく喜んでいたことや、弟もいっしょに何十年ぶりに父母を囲んで琵琶湖畔で食事をしたこと。このときはすでに食欲もなくなっていたときであったが、電動車いすでスイスイお店に入っていき「鮒ずしが食べたい」と父が言い、最期の家族団欒になったこと。思い出を話しているうちに火葬場に着いた。火葬が済み、お骨を拾う時になったら、私は足が竦んだ。娘たちが私の車椅子をぐんぐん押して、部屋にはいった。灰になった父を親戚も囲んでいた。「どうしたらみっちゃん、近付けれるかなあ？それのけてこっちにきたらどうだい？」と私を気遣う親戚の声に驚いた。16年前田舎のためか、障害者を隠そうとする風潮で私がヘルパーさんを利用することも猛反対だった親戚が、どうしたら私も同じようにお骨拾いに参加できるか考えてくれていた。父のおかげである。この瞬間までもが、父が命をかけて教えてくれたことであった。私の背後には大きく育ってくれた優しい子供たちを感じていた。私は、今、テレビで子供の虐待のニュースを聞く度に心が痛む。子供がいたから頑張れた。親がいたから頑張れた自分を思う。現在、私は８年間介護のプロに「重度障害者の移動介護」を教えている。移動が自由にできることがどれほど子育てや介護・また自身の自立につながったか言い尽くせないほどである。たとえ手足が不自由でも同じ人間、生活者である。移動したい、移動しなくてはならない場面は絶対ある。諦めから希望につながるような社会・人になってほしいと心から願い、「移動」を支えられて活かされてきたことに感謝しながら、移動を支える大切さを少しでも伝えていきたいと思う。 |

[▲ このページの上へ](http://www8.cao.go.jp/shougai/kou-kei/22sakuhinshu/sakuhin/kou_kasaku2.html#top)



[障害者施策トップ](http://www8.cao.go.jp/shougai/index.html) ＞ [意識啓発](http://www8.cao.go.jp/shougai/kou-kei/index-kk.html) ＞ [22年度心の輪を広げる体験作文・障害者週間のポスター作品](http://www8.cao.go.jp/shougai/kou-kei/22sakuhinshu/index.html) ＞ 平成22年度入賞作品　高校生・一般部門　佳作